



文化財愛護シンボルマーク

京都府京田辺市

薪遺跡発掘調査概報

2000

京田辺市教育委員会

薪遺跡発掘調査概報

2000

京田辺市教育委員会



園池SG41全景（南東から）

序

本市の中央やや北寄りにある薪地区たきぎは、あの一休禅師が晩年を過ごした酬恩庵（一休寺）があるところとして知られています。

このたび調査を実施したのは、酬恩庵の北西隣の場所です。

調査の結果、全国でも類例の少ない鎌倉時代後期の園池がみつき、さらにそのなかには宴会で使われた大量のかわらけなどがありました。このことからこの場所には、当時のかなり有力な領主がいたことが予想されるようになりました。

最後になりましたが、調査にあたりましては、西薪農住組合のみなさん・関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことをお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解たまわりますようお願い申し上げます。

平成12年3月

京田辺市教育委員会

教育長 村 田 新之昇

例 言

- 1 本書は、平成11年度に京田辺市教育委員会が行った京都府京田辺市薪里ノ内2番地ほかに所在する^{たきぎ}薪遺跡発掘調査の概要報告である。
- 2 調査は西薪農住組合の依頼を受け実施した。
- 3 現地調査は平成11年8月6日に開始し、平成11年12月22日に終了した。
- 4 調査の組織は次のとおりである。
調査主体……京田辺市教育委員会
調査責任者……京田辺市教育委員会 教育長 村田新之昇
調査指導……京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会
調査担当者……京田辺市教育委員会 社会教育課 鷹野一太郎
同 上 五百磐顕一
調査事務局……京田辺市教育委員会 社会教育課（課長 奥田 清）
調査参加者……阿知波琢士・牧 篤志・石田典生・嵯峨山俊道・植西美津子・原クニ江・
岡 百合・多田 望
作業委託……全京都建設協同組合
- 5 調査を実施するについて、西薪農住組合の皆さんをはじめJA京都やましろ本店生活相談部資産管理課には、多大のご協力を賜った。記して感謝します。
- 6 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々からご教示を得た。記して感謝の意とします。（順不同・敬称略）
肥後弘幸・有井広幸・森 正・杉原和雄・田中淳一郎・橋本清一・杉本 宏・平良泰久・
伊野近富・森島康雄・岡崎研一・鋤柄俊夫・井上仁一・田辺宗一・西川 功・西川 滋
- 7 本書の執筆・編集は、鷹野・五百磐が行った。

本文目次

1	はじめに	1
2	位置と環境	2
3	調査経過	6
4	調査概要	9
5	遺物	29
6	まとめ	33

挿図目次

巻頭 園池SG41全景（南東から）

第1図	調査地位置図	1
第2図	薪遺跡遠景（北東から）	2
第3図	周辺主要遺跡図	3
第4図	調査前近景（南から）	6
第5図	作業風景	6
第6図	周辺地形図	8
第7図	SK16埴輪出土状況（西から）	9
第8図	トレンチ配置図	10
第9図	SK36と礎石（南から）	11
第10図	SK36（南から）	11
第11図	SK36 遺物出土状況（部分）	11
第12図	1 トレンチ遺構図	12
第13図	SE67（北から）	13
第14図	SG41 東西アゼ断面（南から）	13
第15図	SG41古（東から）	13
第16図	SG41 断面図	14
第17図	SG41新（南から）	14
第18図	SG41 全景（南東から）	15
第19図	作業風景	15
第20図	SG41新 遺物出土状況（東から）	16
第21図	SG41新 遺物出土状況（南から）	17

第22図	SG41 遺物出土状況（北東から）	17
第23図	ハシ出土状況	18
第24図	下駄出土状況	18
第25図	漆器椀出土状況	18
第26図	SG41 完掘状況（南東から）	18
第27図	礎石群（南から）	19
第28図	SE19 実測図	19
第29図	SE19（東から）	20
第30図	SE19 南西部竹枠	20
第31図	SD29（東から）	21
第32図	SK124 鉄製品出土状況（西から）	21
第33図	SE33（北から）	22
第34図	2・3トレンチ遺構図	23
第35図	2トレンチ全景（西から）	24
第36図	SK206・SD237 南壁	24
第37図	SK206・SD237（南から）	25
第38図	SK215（南から）	26
第39図	3トレンチ全景（南から）	27
第40図	3トレンチ（北から）	28
第41図	SB325（西から）	28
第42図	遺物実測図（1）	30
第43図	遺物実測図（2）	31
第44図	SE33 木製品実測図	32

1 はじめに

たきぎ
薪遺跡は、京田辺市中央北寄りの薪地区にある東西約950m・南北約900mに及ぶ遺跡として知られている。

西薪農住組合では、薪里ノ内2番地ほか約8900㎡を土地区画整理するべく、平成10年10月30日に文化財保護法に基づく届出を提出した。京田辺市教育委員会では、当該地が薪遺跡に含まれること、酬恩庵（一休寺）の北西隣であることから以前より事前の発掘調査が必要となることで協議を進めてきたところであった。

平成11年4月26日に当委員会あてに調査依頼書が提出された。現地調査は平成11年8月6日に開始し、平成11年12月22日に終了した。

なお、西薪農住組合のみなさんをはじめ関係者の方々、ご指導・ご協力くださった皆さま、調査に従事された諸氏、その他多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査地位置図 (S=1:20,000)

2 位置と環境

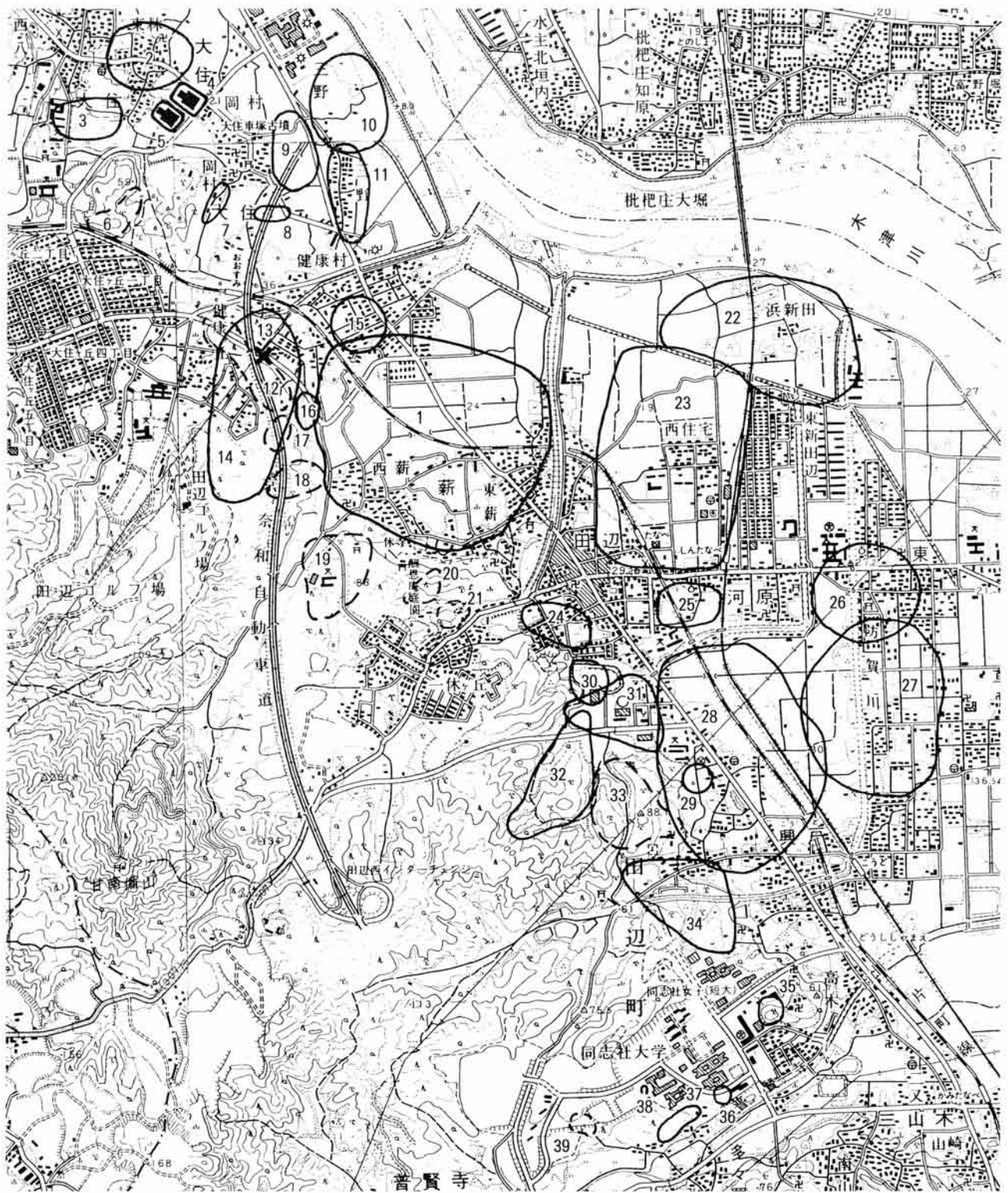
京田辺市は京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央、伊賀山中に源を発する木津川の左岸に位置する。市の西部は生駒山系に連なる丘陵地帯で、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がる南北に長い市である。西部の丘陵から木津川に流れる諸河川は、多くが平野部で天井川化しており、市の景観は独特の様相を呈している。

薪遺跡は市の中央部やや北寄りに位置し、西に木津川の支流である手原川、東に同じく天津神川がそれぞれは北流し、南側には通称天理山丘陵が西から延び、これらに囲まれた範囲に広がる手原川によって形成された扇状地上に立地し、地形は南西が高く北東に向かい徐々に下がっていく。

周辺の遺跡をみると、調査地の北西丘陵上に弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ様式）の狼谷遺跡がある。遺構は確認されていないが、土器や石器（石包丁・柱状石斧・環状石斧）が採集されている。土器のなかには、ツボ棺もみられる。また、堀切古墳群のある丘陵からも中期（Ⅳ様式）の土器がみつきり、小形のカメもあることから何らかの祭祀場ではないか



第2図 薪遺跡遠景（北東から）



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|--------------|-------------|
| 1. 薪遺跡 | 2. 東林遺跡 | 3. 杉谷遺跡 | 4. 大住車塚古墳 | 5. 大住南塚古墳 |
| 6. 城山古墳群 | 7. 塔ノ脇遺跡 | 8. 野上遺跡 | 9. 久保田遺跡 | 10. 三本木遺跡 |
| 11. 三野遺跡 | 12. 郷土塚古墳群 | 13. 小林遺跡 | 14. 狼谷(小谷)遺跡 | 15. 薪城跡 |
| 16. 畑山遺跡 | 17. 畑山古墳群 | 18. 西山古墳群 | 19. 堀切古墳群 | 20. 天理山古墳群 |
| 21. 小欠古墳群 | 22. 伝道林遺跡 | 23. 稲葉遺跡 | 24. 尼ヶ池遺跡 | 25. 河原遺跡 |
| 26. 鍵田遺跡 | 27. 大切遺跡 | 28. 興戸遺跡 | 29. 興戸廃寺跡 | 30. 竹ノ脇遺跡 |
| 31. 田辺遺跡 | 32. 田辺城跡 | 33. 興戸古墳群 | 34. 興戸宮ノ前遺跡 | 35. 田辺天神山遺跡 |
| 36. 都谷遺跡 | 37. 新宗谷館跡群 | 38. マムシ谷窯跡 | 39. 下司古墳群 | |

第3図 周辺主要遺跡図 (S=1:25,000)

とみられている。

続く古墳時代になると西側・南側の丘陵に数多くの古墳が築かれ、薪地区は市内でも最多の古墳地帯となる。これらの古墳は大きく3群に分けられる。ひとつは調査地の南東にある天理山古墳群（4基）・小欠古墳群（3基）、ひとつは調査地の南西にある堀切古墳群（10基と10横穴）、そして手原川の西側丘陵上にある郷土塚古墳群（6基）・畑山古墳群（4基）・西山古墳群（3基）などである。

このうち堀切古墳群の丘陵稜線上に並ぶ4・7～9号墳と丘陵斜面の4～10号横穴、郷土塚古墳群の4号墳、畑山古墳群の2・3号墳が発掘調査されている。

堀切古墳群では、4号墳が全長28mの前方後円墳の可能性がある。7号墳は直径15mの円墳だが、周溝から人物埴輪3体、馬形埴輪1体、靱形埴輪、円筒埴輪5個体以上、須恵器大形器台などがみつかった。ことに人物埴輪の1体はほぼ全身がわかり、顔の中心・あご・帽の縁に直弧文が細かい線で描かれていることから全国的にも注目されている。また6号横穴からは凝灰岩製の組合式家形石棺がみつき、石棺内から成人女子の改葬された人骨1体が耳輪1対・刀子1点などとみつかった。

郷土塚4号墳は、直径16mの円墳で、横穴式石室内から多くの土器類とともに、鉄製の鍛冶道具である鉄鉗・鉄槌がセットでみつかった。

畑山2号墳では、横穴式石室内から凝灰岩製の石棺材片が、3号墳では銅碗がそれぞれみつかった。

発掘調査が行われた以外の古墳でも、ほとんどが横穴式石室を内部主体とする後期古墳であるが、郷土塚3号墳は前期の古墳と推定され、郷土塚2号墳は家形埴輪・鳥形埴輪、鉄鉾・鉄斧・鉄鏝などがみつき中期の円墳とみられている。

続く飛鳥・奈良時代については、まとまった資料が得られていない。郷土塚2号墳の北方で蔵骨器に使用された7世紀後半の須恵器カメが、堀切10号横穴から8世紀の銅製鍔帯金具がそれぞれみつかったがともに墓地であり、古墳時代同様集落跡については薪遺跡内のどこかと推定されよう。

平安時代には、平安京造営の際に中心線の南目印にされた、甘南備山（標高217.5m）の頂上付近に神奈比寺が建立された。この寺のことは『今昔物語集』にも説話がみられる。現在も頂上付近に式内神奈備神社があり、その東方の谷部に大小の平坦面が階段状に続き、古代の山岳寺院跡が良好な状態で残っている。寺は元禄2年（1689）薪山垣外に移され、今なお法燈をともしている。

保元3年（1158）には、薪は石清水八幡宮の荘園になっていたことが資料（石清水八幡宮文書）からわかり、鎌倉時代には北にある大住荘（興福寺領）とその境界をめぐる争いを続けていた。この争乱のことは、『吾妻鏡』や藤原定家の日記『明月記』、『百練抄』な

どにも記録される大きな騒動であった。

鎌倉時代末期の正応年間（1288～93）に大応国師が妙勝寺を草創したと伝えられている。薪の一休寺として知られる酬恩庵の前身である。一休が妙勝寺を復興し酬恩庵を開いたのは康正2年（1456）のこととされている。

薪遺跡では昭和41年（1966）に薪高木31番地・32番地で小規模な発掘調査が行われている。この調査では、東西方向の幅1.6m、深さ0.5mの溝がみつき、かなりの量の土師器・須恵器があり6世紀後半頃のもものとされた。遺物のなかには緑釉陶器もあった。

平成5年（1993）12月に薪堂ノ後18番地で須恵器の杯蓋5点・ツボ、土師器の小形ツボが約1m×1mの範囲にかたまって置かれた状態でみつかった。土坑などではなく地上に置かれたものらしく、祭祀に関係したものとみられる。

以上のように、この薪地区は弥生時代から遺跡がみられ、特に数多くの古墳があり、中世には一休が晩年をすごし、88歳で入寂した後は彼を慕う多くの人々が訪れる所であるが、いくつかの古墳を除くと発掘調査の例は少ない。

3 調査経過

今回の調査対象地は、酬恩庵一休寺の北西隣、薪神社の東側で現在の集落よりも一段高い河岸段丘上にあたる。地元では「モンドヤシキ」「シロヤシキ」と呼ばれる所でもある。

調査前の状況では、中央部の竹藪・水路を除くと畑地であったが、東端部には、廃屋・植林地等があった。東側の畑地部分はほぼ平坦だが、東寄りの部分で一段低くなっており、そこに南北方向の石垣が



第4図 調査前近景（南から）

築かれていた。石垣の基礎に丸太材を用い胴木としていた。土地所有者の話によると、大正年間に積んだものらしい。一部を断ち割ってみると、石垣に通常みられる裏込めはなく、



第5図 作業風景

わずかに土砂がつめてあるだけで石壁といった状況であった。西側の畑地はそれぞれがかなりの高低差をもち、大きな造成を受けていると考えられた。

調査は平成11年8月9日、まず東側に設定した1トレンチの調査から開始した。重機掘削をはじめるとすぐに近世の土器類にまじり円筒埴輪の破片が見つかった。

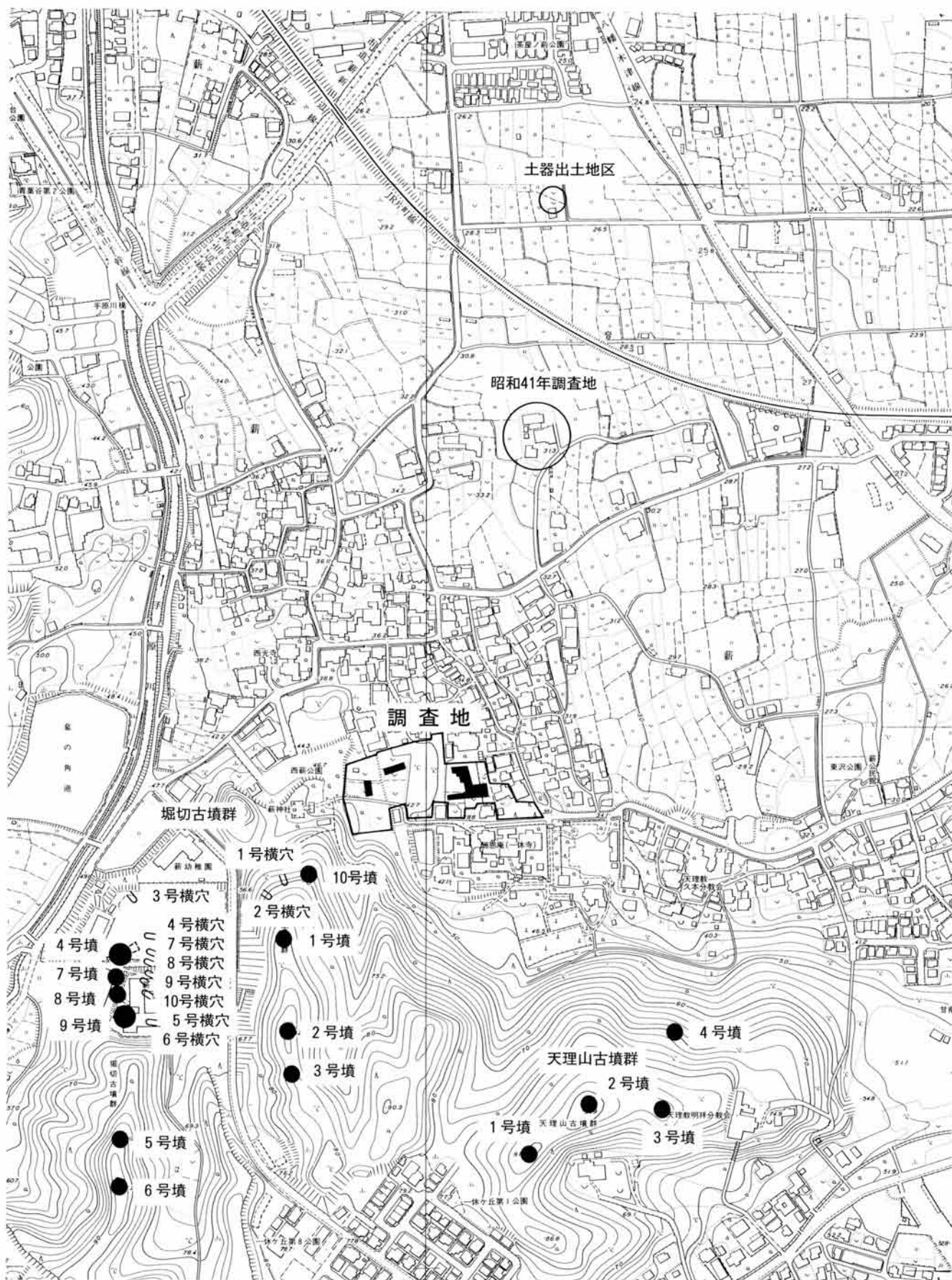
9月下旬に1トレンチ中央北寄りのよくわからない落ち込みと土坑・ピットのいくつかを残すのみとなり、西側の2・3トレンチの調査を始めた。この時点では1トレンチの落ち込みは、土師器皿の完形品などが大量につまった土砂で谷地形を埋めたものかと考えていた。

調査を進めるにつれて、これが鎌倉時代後半の園池であることがわかり、鎌倉時代には2・3トレンチをも含めた広大な屋敷地ではないか、そしてそれが近世まで続いたと推定されるに至った。

園池の西側の壁付近からは大量の投棄された大小の土師器皿やハシ・ゲタなどの木製品が見つかり、土坑とみていたものが珍しい竹組の井戸であることがわかったり、それまでのややゆっくりした流れの調査から急な動きへと変化した。

当初は10月末で調査終了を予定していたが、期間を大幅に延長し、11月11日に報道機関への発表、11月13日には現地説明会を開催した。

その後園池の西側、建物想定部分を一部拡張、園池内の遺物とりあげに時間を要し、年末も近づいた12月22日にすべての作業を終了した。



第6図 周辺地形図 (S = 1:5000)

4 調査概要

調査は前述のように3か所のトレンチを設定して行った。以下トレンチごとに概要をみることにする。

(1) 1 トレンチ

東側に設定したユ字形のトレンチ。遺構面は西が高く東が低い。表土下に近世後半以降の遺物を含む包含層があり、その頃耕作地になっていたと考えられる。

中世の遺構はトレンチ北部、西部でみつきり、近世のものは各所でみつかる。断ち割りを行ったところ、トレンチの東部は中世には谷地形であり、近世のおそらく後半に谷を埋める造成工事を行っていたことがわかった。

また石垣の東部は、江戸時代後半以降から水田として利用されたようで、それ以前は湿地帯であることがわかった。

(ア) 中世の遺構

SK16 トレンチ北部でみつかった埴輪（円筒・形象）がつまった東西1.1m、南北1.5m以上の土坑。6世紀の須恵器がごくわずかにみられる。埴輪だけで整理箱約3箱分ある。館造成時に付近にあった埴輪をまとめたものとみられ、この付近に古墳があった可能性もある。

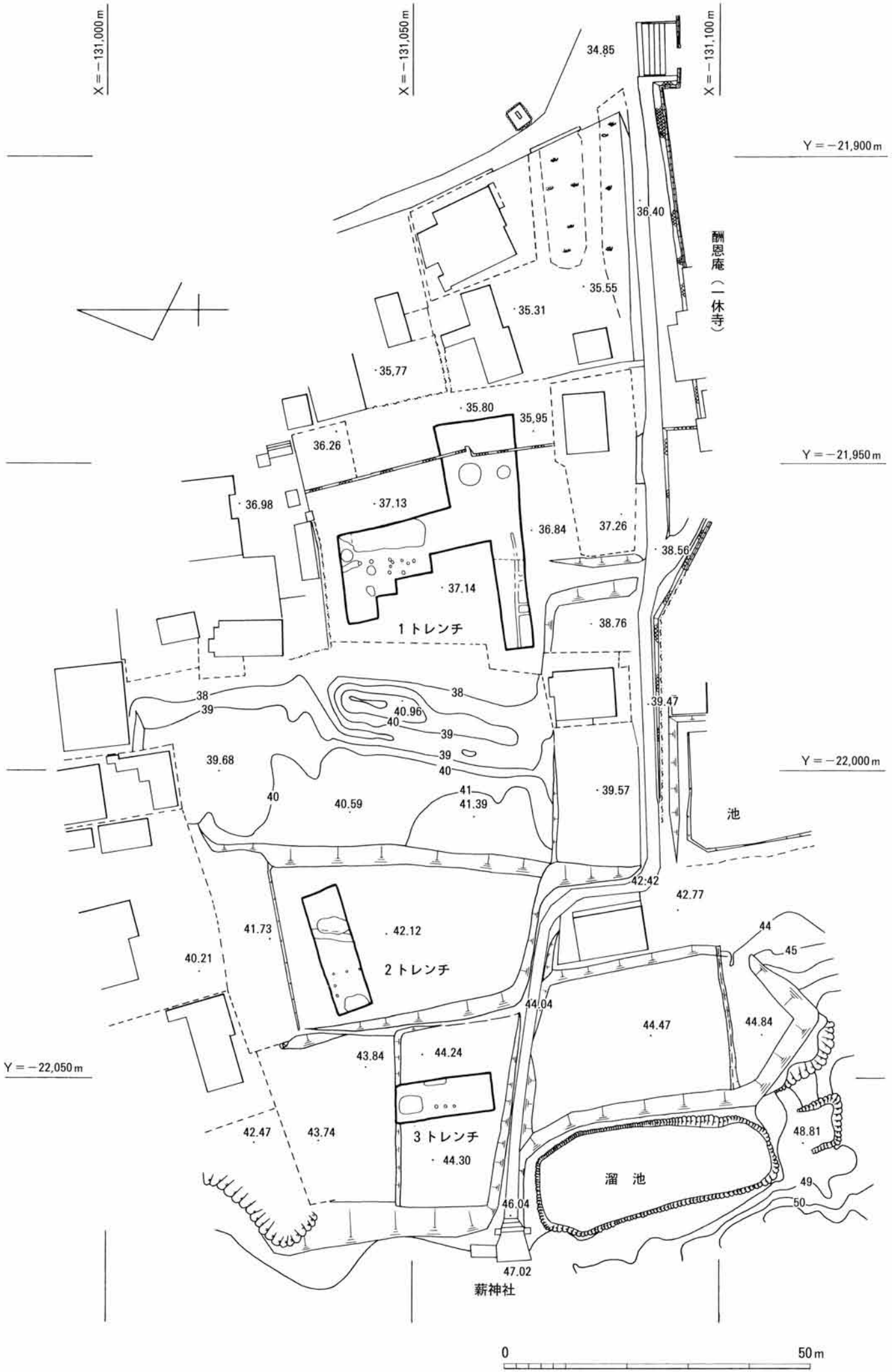
SK36 トレンチ北部中央でみつかった直径約1.5m、深さ約0.95mの不整円形の土坑。壁は直線的であり底は平らである。埋土及び底付近から多くの瓦器碗（完形品多



第7図 SK16 埴輪出土状況（西から）

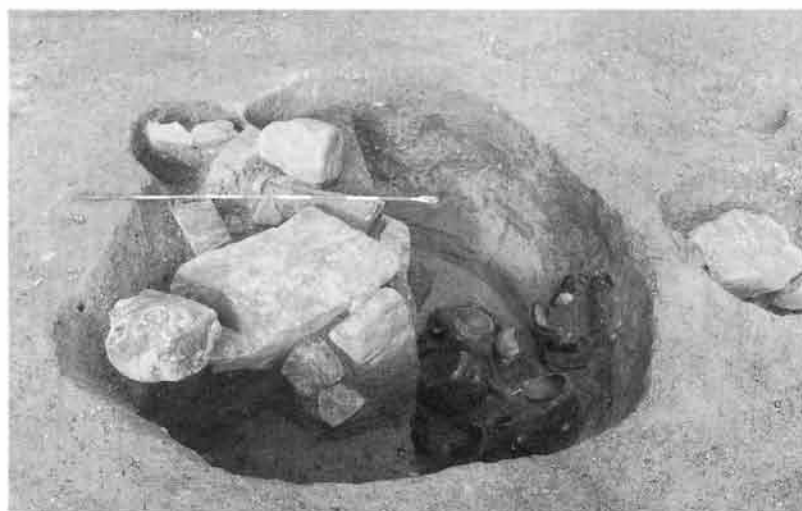
数）、瓦器足釜、土師器皿、木製品などがみつかった。鎌倉時代後半（13世紀後半）。識別できなかったが、西寄りの上半部は礎石列のひとつの掘方はいりこむ。

SE67 トレンチ北東隅の東壁際でみつかった円形の掘方をもつ井戸。掘方の直径は約4.3m、深さ2.5m以上を測る。井戸の約半分はトレンチ外である。ほぼ中央に内径約1m



第8図 トレンチ配置図

の石組みの井戸側をもつ。石は最大で長径約0.25m程のものを小口積にしている。この井戸側部はSG41（古）の底でみつかった。この底レベルから深さ約1.5mまでの遺物は取り上げたが、それ以下及びトレンチ外は調査できなかった。



第9図 SK36と礎石（南から）

遺物は掘方から土師器皿、瓦器碗・釜・ミニチュア釜、白磁、青磁のほか火打金などが、内部からは土師器皿、瓦器碗・釜、常滑焼のカメ、白磁杯、青磁盤・碗、褐釉四耳壺のほか大量の焼けた壁土、木炭、竹炭が見つかった。鎌倉時代後半（13世紀後半）。

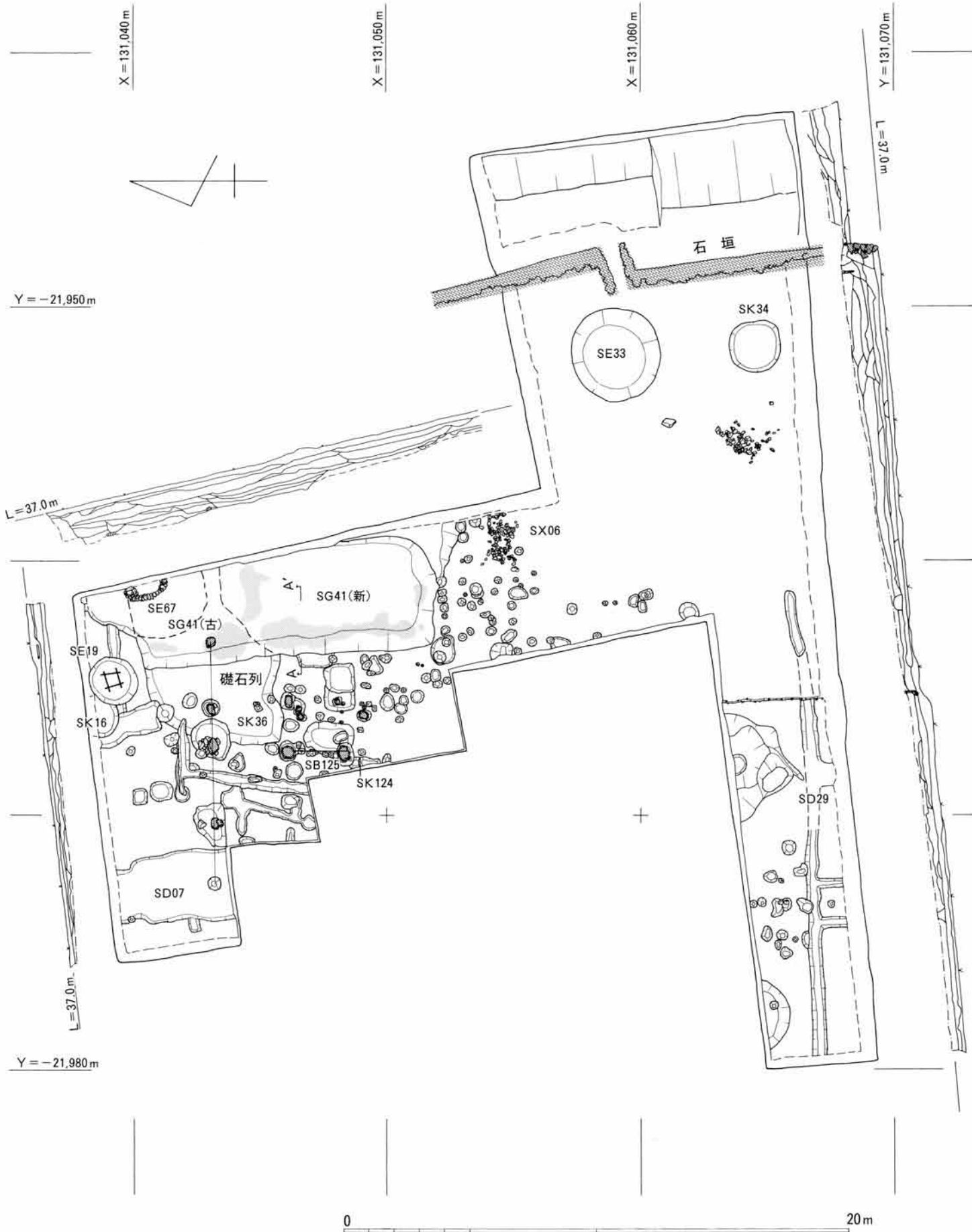


第10図 SK36（南から）

SG41 1 トレンチ北部東にある南北に長い、ほぼ長方形の園池である。北東隅・東辺はトレンチ外に続く。護岸施設はなく素掘りのままである。導水施設はもたずに、地山である底や壁下方から湧き出た水が常に底から

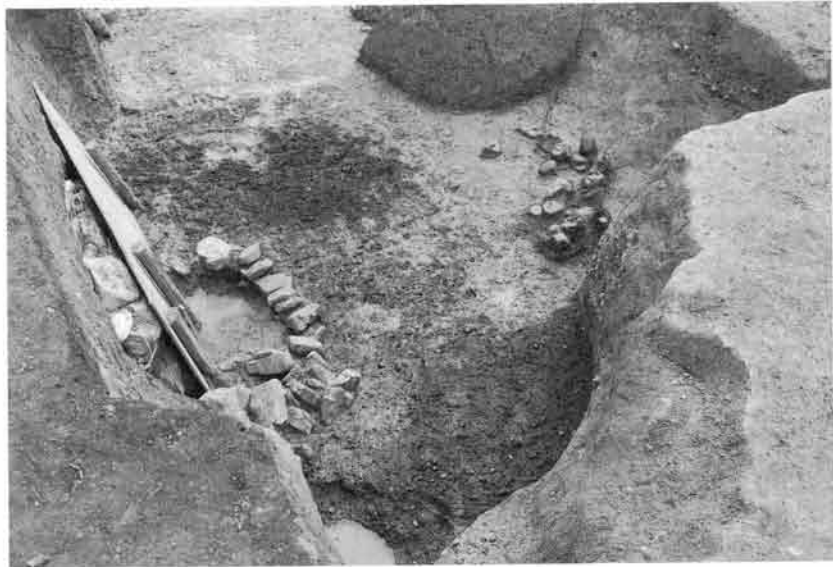


第11図 SK36 遺物出土状況（部分）



第12図 1 トレンチ遺構図

0.5m程度滞水して
いたようである。底
や西側岸辺からは完
形を多く含む土師器
の大小の皿を中心と
した大量の遺物がみ
つかった。皿のうち
灯明皿はごく少量で
あり圧倒的多数は食
器で、ハシなどもあ
り、瓦は含まれない。



第13図 SE67 (北から)

土器は完形のもの
が多く、まとまった数量で繰り
返し捨てられていることなど
から儀式(宴会)に使用され
たものと思われる。

また北端部の底には園池が
つくられる直前に廃棄された
石組井戸(SE67)があり、
トレンチ東壁部では、園池底
のラインは石組の北端部と重
なる。つまり、井戸を意識し
ての池の掘削と考えられる。



第14図 SG41 東西アゼ断面(南から)

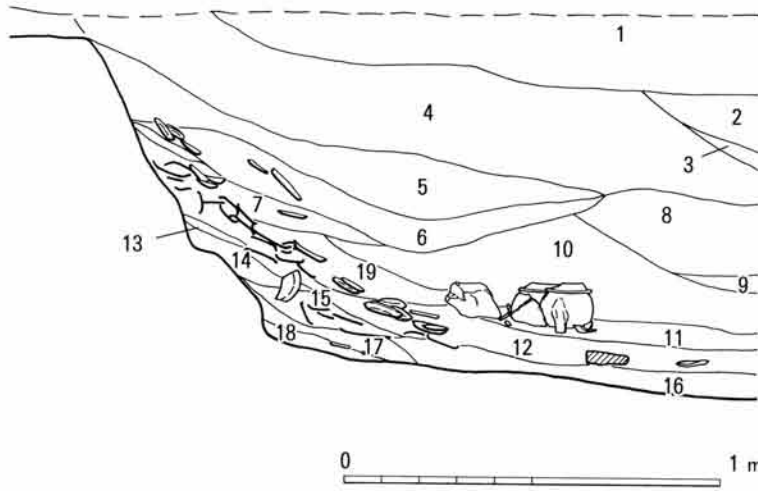
なおSG41は、造り替えが
されており、これを期に(古)
(新)とわかるが、双方の遺
物に時期差はなく、ともに鎌
倉時代後半(13世紀末)で納
まる。このことから造り替え
は早い時期に行われたことが
わかる。

SG41(古) 南北4.5m以
上、東西4m以上、深さ約1



第15図 SG41古(東から)

A L=36.8m



1. 褐灰色砂質土 (レキまじり)
2. 褐灰色砂質土 (黄色砂・レキまじり)
3. 明茶褐色粘質土
4. 褐色砂質土 (黄色砂・レキまじり)
5. 暗褐灰色砂質土
6. 灰褐色粘性砂
7. 暗灰褐色粘性砂
8. 暗灰色粘質土 (砂レキまじり)
9. 黒灰色粘質土
10. 暗灰色粘質土 (灰色砂まじり)
11. 黒灰色粘土褐色砂互層
12. 黒灰色粘土
13. 灰色砂
14. 淡褐色砂
15. 灰色粘質土 (砂まじり)
16. 暗青灰色粘土 (砂まじり)
17. 黄灰色粘土 (砂まじり)
18. 暗灰色粘性砂質土
19. 黒色粘土

第16図 SG41 断面図

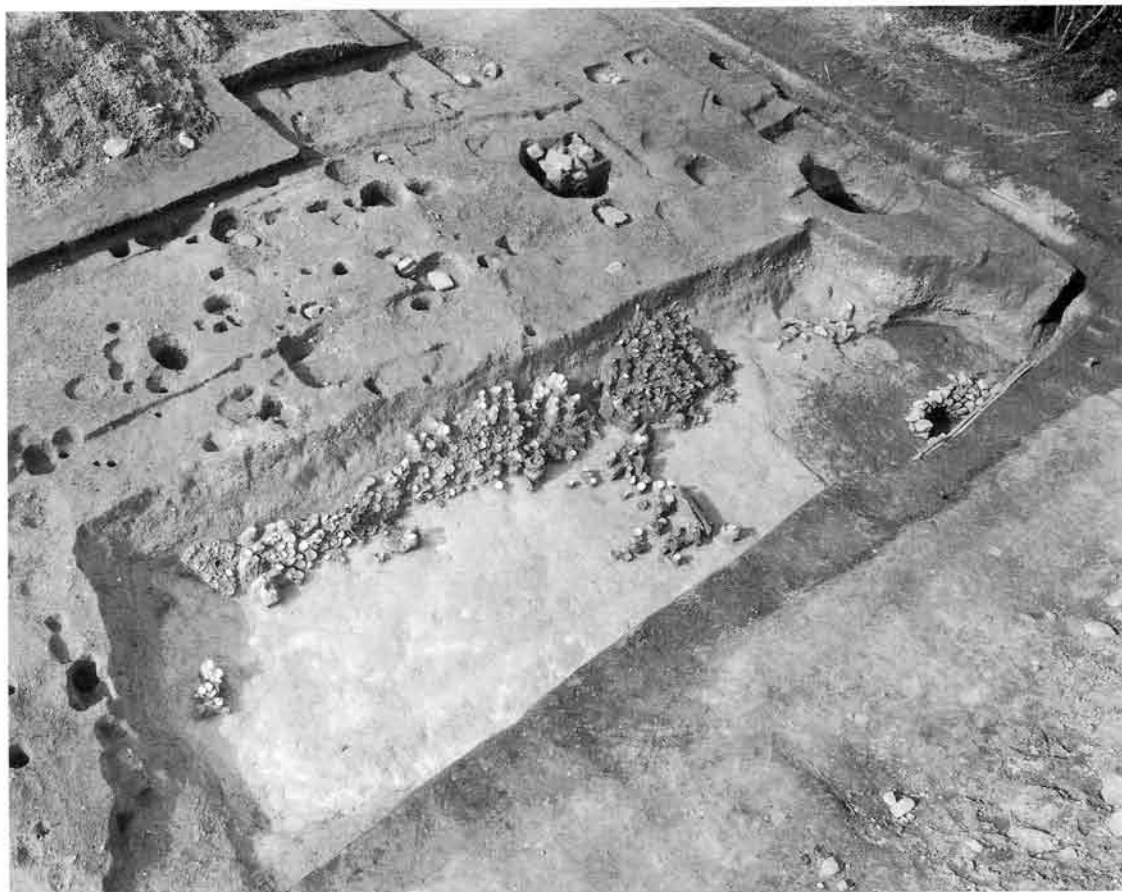


第17図 SG41新 (南から)

mの規模をもつ、最初の園池。南は造替えた園池SG41(新)に切られ、東はトレンチの外になる。残っている北・西の岸壁は、約25°の急斜面で、稜線はほぼ直線である。

園池の全体はあきらかでないが、ここではトレンチ内に残存する部分を41(古)と呼ぶことにする。

遺構内の土層は、大きく2層にわけられる。まず下層は、園池使用時の堆積層である。暗灰色・黒灰色系土層が西岸沿いから底まであり、中央部ではみあたらない。黒灰色系土層は西岸際の南で、底から約0.8mの高さから裾幅約2mで半円錐状に厚く堆積している。



第18図 SG41 全景（南東から）

北西隅で底面直上から少しあつたほかは、遺物のほとんどがこの層でみつがっている。上層は黄褐色・青灰色系の土層である。中央部では底面からあり、0.8mの高さまで。(古)を埋戻した時の土層で、土師器皿等の遺物が少し含まれる。下半部は滞水のため青灰色である。上層は茶褐色系土層で、(古)を埋める際の造成の土層である。完形に近いものを含む遺物が層の境や壁際からみつがっている。上面には東西方向の礎石列の東端の礎石が据えられる。またこの層には、人頭大の石が混じり込んでいる。

(古)では土器を中心とした遺物が各層位からみつがっているが、そのほとんどは西岸沿いの黒灰色土からである。半円錐状



第19図 作業風景

の土層の上面・中層に土師器皿（大小）、瓦器碗を中心とした土器が完形またはそれに近いものを多く含みみつかっている。特に上面では幾重かの土師器皿や瓦器碗が、面に沿って広がっており、いずれも同じ地点から複数回数の一括投棄を行ったことがわかる。

遺物はほとんどが土師器皿で、瓦器碗がそれに続くが、ほか瓦器ナベ・足釜、東播系須恵器捏鉢、青磁碗、白磁皿、石鍋、鉄鍋、ハシ等木製品、木片、須恵器杯（奈良時代）、埴輪がみつつかっている。

また（古）は、遺物の時期差がないことなどから早い段階で埋められ（新）に造り替えられたことがわかるが、調査においてその理由等を明らかにすることはできなかった。

SG41（新） 南北約8.6m、東西4.6m以上、深さ約1mを測る。（古）を埋め立て、整地し新たに造り替えた園池である。西から南岸の稜線は波うち、やや北東に傾く感がある。斜面は約40°で、南東は中途に低い段を持つ。東から北西はトレンチの外になる。東の断面には西側でみられるような高い岸はみられず、岸は一段低いものであった可能性がある。

土層は、下層が暗灰色系土で下は粘土層、上は砂質土層となっている。西では岸に沿って厚く、中央部では0.1～0.2mの厚さで堆積、遺物はこの上面に多い。中層は0.8mの高さまで、やや赤みがかっている黄褐色系土層が入る。上層は、（古）に近い茶褐色系土で平地に造成されている。また西岸際では、中・下層に入りこむ灰色の薄い砂層が、何層もみられる。

遺物は各層位全体からみつつかっているが、主に西岸際から底にかけて多く、層位では底は暗灰色系土層上から西岸際では上層までかたまってみつつかっている。出土状況は大小重ねて置かれたかのような南端の一群を除き、西岸上から完形の土器をまとめて投げ込むことを何度も繰り返していたようで、地点ごとに裏表の向きは不統一ながら平らに積み重ね、立っているものは少ない。

北西部分、足釜周辺の箇所では、土器は特に厚い堆積をみせる。上方まで土器があることやハシなどの木製品もまとめてみつかると、最も多い回数の投棄が行われた地点であると思われる。儀式はこの西側で行われたのであ



第20図 SG41新 遺物出土状況（東から）

ろう。

また土器間に砂層が入っていたり、下層には破片が多く一地点に固まる傾向にあるのに比べ、上面は完形が多く広がっているように見えるのは、投棄が一定間隔をもって行われていることや、投棄の方法が時によって変化した可能性も考えられる。

遺物の種類は、ほとんどが土師器皿（大小）である。続く瓦器碗は、（古）と比べて極端に少なくなる。このほか土師器では碗・カメ、東播系須恵器捏鉢・カメ、常滑焼カメ、瓦器ナベ・カマ・足釜、白磁杯のほか、漆器碗・皿、曲物、ゲタ、ハシ、折敷縁板、竹籠などの木製品、木・



第21図 SG41新 遺物出土状況（南から）

竹片、銭貨、須恵器杯・フタ、埴輪がみついている。また須恵器杯には、墨書されたものが1点みついている。

特にハシは北西部分で大量にみついている。多くが同じ方向でまとまってみついていることから、束ねて捨てられたようである。

その後、この（新）も埋められ平地になっている。この時の埋土（上層）にも土師器皿が多く含まれているほか、瀬戸焼卸し皿、山茶碗、石鍋、瓦器火鉢・小壺など14世紀前半の遺物がみついている。



第22図 SG41 遺物出土状況（北東から）



第23図 ハシ出土状況



第24図 下駄出土状況



第25図 漆器椀出土状況



第26図 SG41 完掘状況 (南東から)

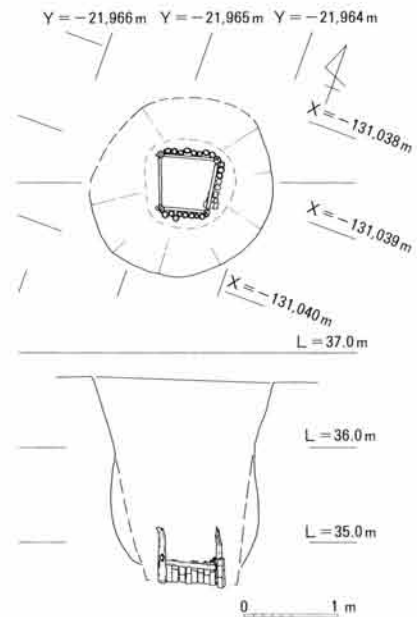


第27図 礎石群（南から）

礎石列 トレンチ北部でみつかった東西に並ぶもの。4か所確認し延長7.1mを測る。方位はN91° W。東端のものはSG41古が埋まった段階で置かれている。東から3番目のものはSK36のなかの西寄りのところに置かれ、礎石を安定させるため多くの人頭大の石をその下に入れている。西端のものは上下2段あり、上段の石は少し南にずれている。この西端礎石の西延長2.4mのところにも江戸時代（18世紀後半）の南北溝の底に掘方がみられ、一連のものと考えられる。

遺物は少ないが、東から3番目の礎石（SK36内）の下から14世前半の土師器皿がみつかった。

SE19 トレンチ北端東部でみつかったほぼ円形の掘方をもつ井戸。掘方の直径は1.9~2.0m、深さ約2.2mをそれぞれ測る。内部に一辺約0.6mの隅柱横棧留めで竹を縦に並べた井戸側があった。土圧により、北辺以外は柱・棧とも移動している。井戸側の方位は北辺でN104° Wを測る。隅柱は直径0.05~0.08mで、下部にホゾ穴が開けられ、そこに直径0.04mの丸木材ないしその半切材を差し込み棧としている。隅柱は高さ0.6m残っていた。その外側に直径0.06m程の丸竹を一辺につき8本立て並べて



第28図 SE19 実測図



第29図 SE19 (東から)



第30図 SE19 南西部竹枠

いた。西辺には残っていなかった。竹は最大のもので高さ0.15m程残っていたが、水分を含みブヨブヨの状態では取り上げられなかった。井戸の底は砂礫層で特に水溜としての施設をみつけられなかった。

遺物は土師器皿、瓦器碗、円筒埴輪、青磁碗、須恵器、陶器が見つかった。鎌倉時

代末～南北朝時代（14世紀前半）。

SD29 トレンチ南西部で見つかった東西方向の溝。幅0.5～0.6m、深さ0.1～0.14m、延長19m分確認し、さらに西方に延びる。方位はN92° W。途中3か所にこれと直交し南に延びる溝がある。鎌倉時代末～南北朝時代（14世紀前半）。敷地内の区画と東側（谷部）への排水を兼ねた溝であろう。

遺物は土師器皿、瓦器羽釜、青磁碗などがある。

SB125 トレンチ北西部で見つかった門跡。南北に並ぶ2か所の礎石からなる。方位は



第31図 SD29 (東から)



第32図 SK124 鉄製品出土状況 (西から)

N1° E。北のものは南北0.65m、東西0.8mの楕円形の掘方に径約0.45m、厚さ0.25mの石を入れている。南のものは東西約0.9m、南北0.65mの楕円形掘方に長径0.6m、短径0.4m、厚さ0.25mの石を入れている。共に石は地上に露出せず完全に穴の中にある。石の心々間で2.2mを測る。南側の掘方の上部は室町時代の初期（15世紀初頭）の遺物を含む土坑がおおうため、それ以前の時期と考えられる。

なお、この1.5m東側にも南に少しずれて南北に学ぶ礎石があり、同様の門跡の可能性も考えられる。

SK124 トレンチ北西部西壁際の土坑。径約0.5m、深さ0.12m。内から、鞍金具の一部と思われる金属製品がみつかった。時期は不明ながら周囲の状況から、室町時代初期頃と考えている。

(イ) 近世の遺構

SX06 トレンチ中央部でみつかった集石遺構。東西2m以上、南北約1mの不整長方形のかたち集石されている。石に混じり、瓦や唐津焼の皿がみられる。伊万里焼が含まれないことから江戸時代初期（17世紀前半）。

SE33 トレンチ東部でみつかった円形の井戸。直径3.4~3.6m、深さ1.34mを測る。底中央部付近には人頭大より少し小さいめの角石が厚さ0.2mみられる。もとは石組みの井戸であったと考えている。

遺物は土師器皿、伊万里系磁器、陶器、瓦、円筒埴輪のほか、「新」と焼印された曲物の底板がみつかった。江戸時代（18世紀後半）。

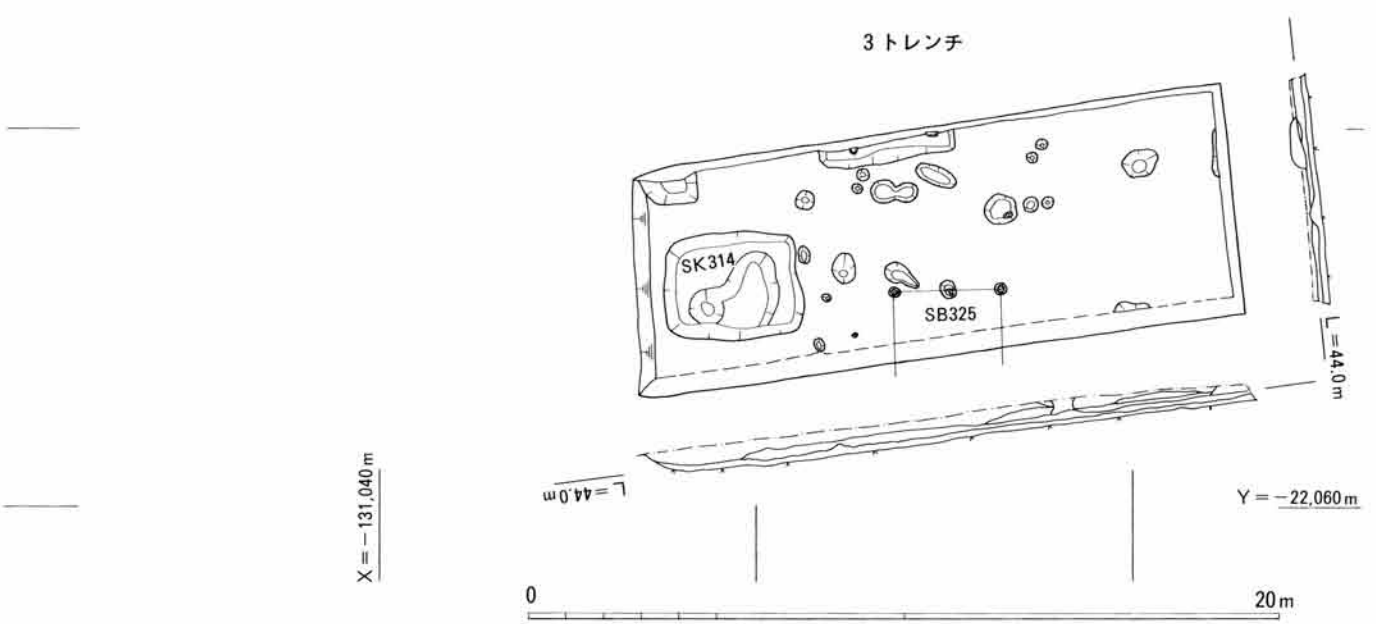
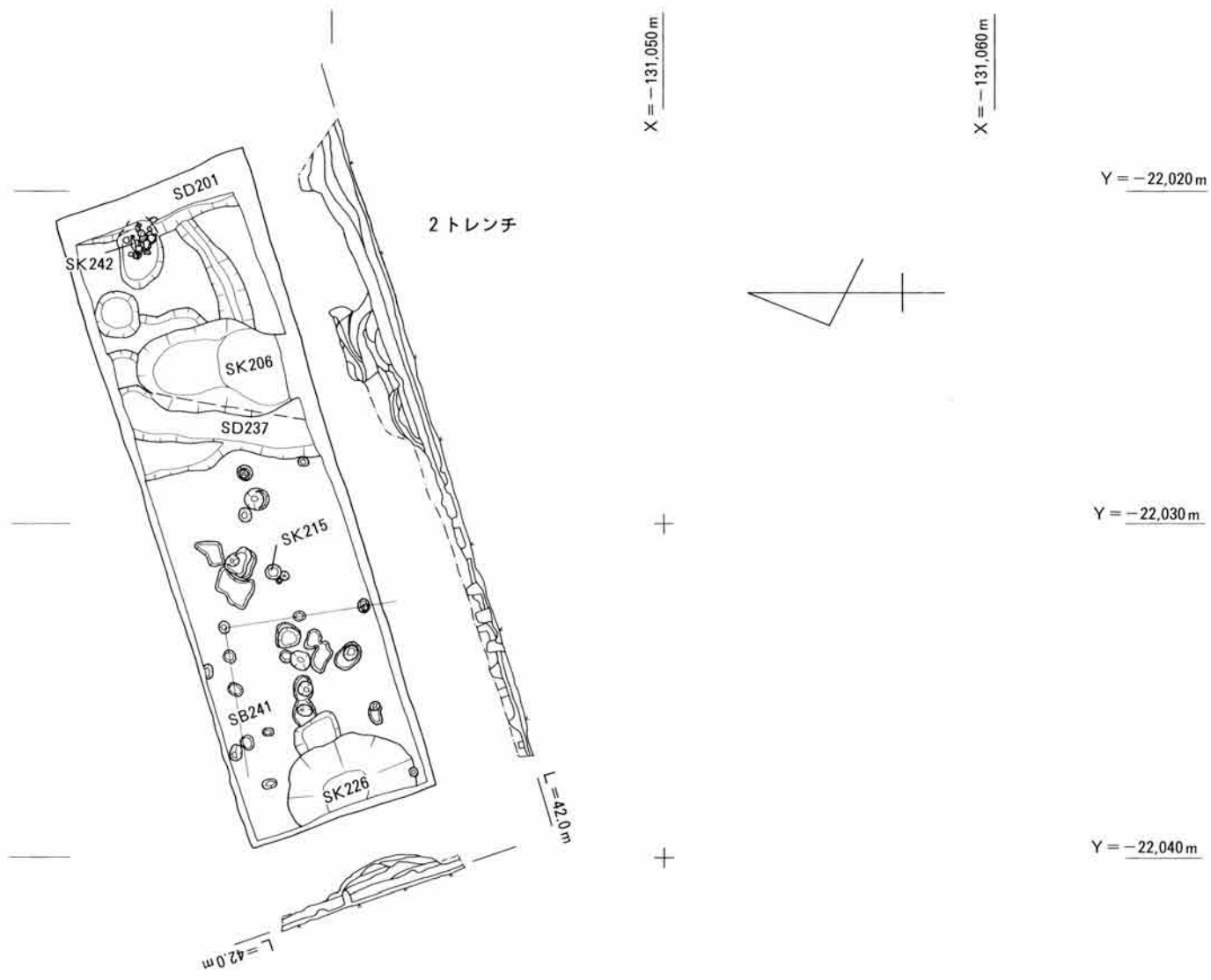
SK34 トレンチ東南部、SE33の南でみつかった円形土坑。直径2m、深さ0.4mを測る。



第33図 SE33（北から）

SD07 トレンチの北西部でみつかった南北方向の溝。幅約2.5m、深さ0.2mで5m分確認した。さらに南北に延びるが、トレンチ南西部ではみつかっていない。

遺物には伊万里系磁器が含まれ、江戸時代（18世紀後半）。



第34図 2・3トレンチ遺構図



第35図 2 トレンチ全景 (西から)



第36図 SK206・SD237 南壁

(2) 2 トレンチ

西側に設定した東西に長いトレンチである。遺構面は西から東に向け徐々に低くなり、東端で傾斜を増す。遺構面の標高は西端で41.9m、中央部で41.6m、東端で41.2mである。みつかった遺構には、掘立柱建物跡・溝・土坑・祭祀ピットなどがある。

SD201 トレンチ東端で西側の肩がみつかった南北方向の溝とみられるもの。方位はおおよそであるが、N15° W。東側はトレンチ外に続く。

遺物は土師器皿、瓦器碗などがみつかった。鎌倉時代後半（13世紀後半）。

SK242 トレンチ東端北寄りでみつかった土坑。SD201に重なっている。東西2.1m以上、南北1.4mを測る。内部には人頭大ほどの石が多く入りこんでいた。

遺物は石に混じり、土師器皿、瓦器スリ鉢などがある。桃山時代（17世紀初頭）。

SD237 トレンチ東部でみつかった南北方向の断面逆台形の溝。方位はN16° E。幅1.2～1.5m、深さ0.6m、延長6m分確認し、さらに南北に続く。SK206に重なり、土坑より新しい。

遺物は土師器皿などがある。江戸時代。

このトレンチの東方、1 トレンチの西方に現在も流れている水路とその東側に土塁状の高まりがあるが、この溝と方位がほぼ同じであり、同時期に作られた可能性がある。

SK206 SD237の下にある土坑で深さ1.2mを測る。当初SD237と同一の大きな濠のようなものとして調査したが、断面観察、底の形などからいくつかの土坑が重なり、その後



第37図 SK206・SD237（南から）

SD237が作られたと判断できる。

遺物は土師器の皿・釜、瓦器の椀・スリ鉢、常滑焼のカメ、信楽焼の捏鉢、東播系のカメ、白磁の杯、鉄滓、銭貨、漆膜などがある。常滑焼カメ、信楽焼鉢、東播系カメは13世紀後半から14世紀前半のものとみられるが、他の遺物は16～17世紀のものであり、SK242と同時期のものであろう。



第38図 SK215 (南から)

SB241 トレンチ西部でみつかった掘立柱建物跡。南北2間(4.3m)以上、東西2間(3.6m)以上の規模をもつ。東辺柱列のトレ

ンチ南壁際の掘方には、長径0.2mの根石がある。方位はN7°W。掘方から遺物はみつかっていない。

SK215 SB241東柱列の東1.4mにある、直径0.4mの土坑。深さ0.27mを測り、底から約0.2mの高さまで輝緑凝灰岩の小石(長径2～4cm)がぎっしりと詰まり、その上に炭まじりの土が0.05m程あった。建物の東で緑(=あお)石があることから、四神相応の思想による祭祀が行われたと考えられる。

SK226 トレンチ西端でみつかった土坑。長径4mを測り、トレンチ外に続く。

遺物は土師器皿、瓦器椀・提子・火鉢・羽釜、信楽焼捏鉢、石鍋などがある。南北朝～室町時代(14～15世紀)。

(3) 3 トレンチ

西側の高所に設定した南北に長いトレンチである。ここからの眺望はよく、現在の薪集落がみわたせ、さらに木津川、比叡山が視界に入る。すぐ西側は薪神社の境内地である。遺構面は平坦で標高約44m、2トレンチ西側の遺構面とは比高差2.1mを測る。

みつかった遺構には、掘立柱建物跡、方形土坑、ピットなどがある。

SK314 トレンチ北部でみつかった隅丸長方形の土坑。南北3.7m、東西2.9m、深0.34mを測る。

遺物は土師器皿、瓦器火鉢(深鉢)、瓦がある。戦国時代(16世紀初頭)。

SB325 トレンチ中央西寄りでみつかった掘立柱建物跡。東辺のみを確認した。南北2間(2.8m)、東西1間以上。掘方は直径0.2～0.5mの円形で、いずれも根石をもつ。方位はN1°W。掘方からの遺物はなく時期不明。

なおトレンチ掘削前に東側で一部試掘したところ、厚い遺物包含層があり、鎌倉時代後



第39図 3 トレンチ全景（南から）

半（13世紀後半）の東播系カメ、青磁盤などがみつかった。トレンチ内で同時期の遺構はなかったが、調査区西側（2・3トレンチ）でも東側と同様に何らかの施設があったことは十分に考えられる。



第40図 3トレンチ (北から)



第41図 SB325 (西から)

5 遺物

今回の調査では遺物包含層や遺構から、大量の土器をはじめ、木製品、石鍋、銭貨、金属製品、壁土などコンテナにして約50箱分の遺物がみつまっている。なかでも園池からは約14箱分がみつまっている。土器では土師器が最も多く、ほかに瓦器、墨書土器、緑釉陶器、山茶碗、陶器、磁器、須恵器、瓦、埴輪などがみつかった。

土器を時期的にみると、鎌倉時代後半から鎌倉時代末ないし南北朝時代（13世紀後半～14世紀前半）の遺物が圧倒的に多く、15～18世紀までのもの、古墳時代のもの、奈良時代のものがある。

特に遺構の集中する13世紀後半においては、土師器皿や瓦器碗の製作技法に大きな差異はなく、法量に若干の変化がみられる。土師器皿では、口縁部に強い一段ナデを行い、やや外反させるも、口径と底径の差が少ない形態のものがほとんどを占めている。

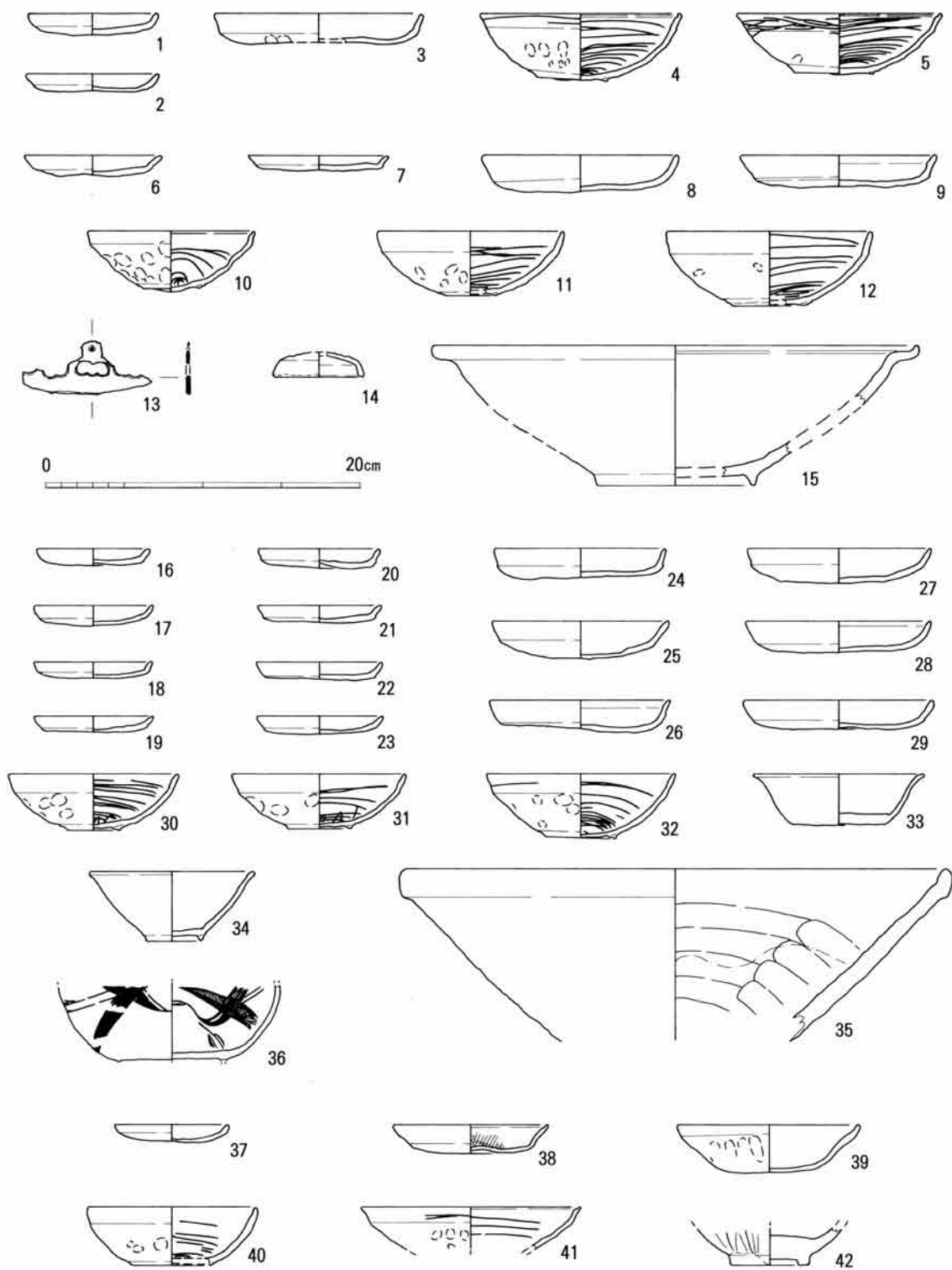
以下では、この遺跡の中心となる遺構の土器を取り上げ概観してみたい。

1～5は、SK36の土器である。1・2は土師器の小皿で、それぞれ口径8.2cm・8.3cm、器高1.4cm・1.0cm。1はやや厚めの底部をもつ。3は土師器大皿で、口径13.0cm、器高1.8cmをはかる。口縁部はやや外方へひらく。4・5は瓦器碗である。4は口径12.6cm、器高4.2cm。5は口径12.8cm、器高3.8cmをはかる。ともに口縁端部の内側に沈線が廻る。内部には全体にラセン状の、口縁部外面には横方向の暗文が施される。底部には中心のずれた三角形の高台をもつ。SK36の土器は13世紀後半のものである。

6～15は園池の内部でみつかった石組井戸SE67の内部（13のみ掘方）のものである。6・7は土師器小皿で、口径8.6cm・8.8cm、器高1.2cm・0.9cmをはかる。口縁部はひらきぎみ。8・9は土師器大皿で口径12.2cmと12.3cm、器高は2.3cmと2.0cmである。10～12は瓦器碗である。10は口径10.6cm、器高3.8cmで、口縁端部内側に沈線が廻り微小な段をもつ。底部は底よりやや上に三角形の高台を貼り付ける。11は口径11.6cm、器高4.1cm、12は口径12.8cm、器高4.7cmをはかる。全て内部に暗文が施されるが、外面にはない。13は長さ8.1cm以上、高さ3.4cm、厚さ0.3cmの火打金である。14は口径5.7cm、器高1.7cmの青白磁の合子蓋である。外面には淡い青灰色の釉がかかる。15は青磁盤で、口径30.4cm、器高約8.8cmのもの。高台端部以外に緑色の釉がかかる。14・15は共に、中国製品である。

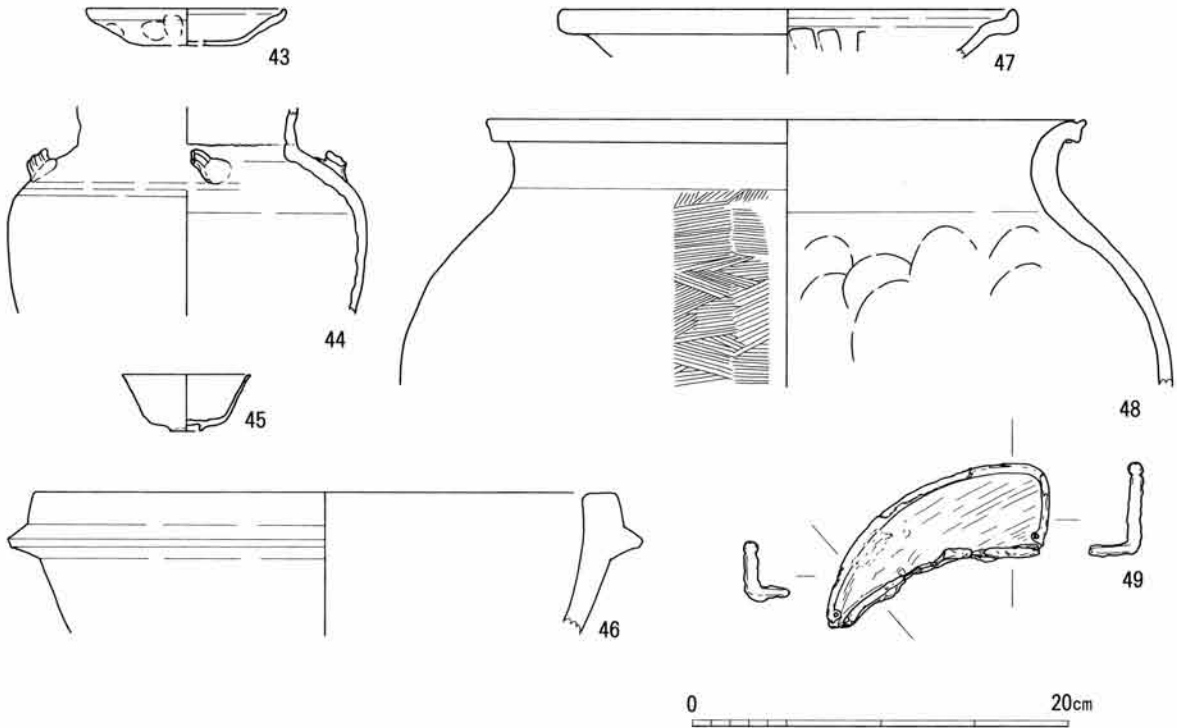
SE67の遺物も13世紀後半の特徴をもつが、SK36と比べて、瓦器碗の法量の減少、外面ミガキの消失から、やや降った末葉に近い時期のものである。

16～36は園池SG41新のものである。16～23は土師器小皿で口径は7.4～8.0cm、器高は1.0～1.3cmをはかる。24～29は土師器大皿である。口径は10.7～11.8cm、器高は1.8～2.3cmを



- 1 トレンチ SK36: 土師器小皿 (1・2)、大皿 (3)、瓦器碗 (4・5)
 SE67: 土師器小皿 (6・7)、大皿 (8・9)、瓦器碗 (10~12)、火打金 (13)、青白磁合子蓋 (14)、
 青磁盤 (15)
 SG41: 土師器小皿 (16~23)、大皿 (24~29)、瓦器碗 (30~32)、白磁杯 (33)、山茶碗 (34)、東播
 系須恵器摺鉢 (35)、漆器碗 (36)
 SE19: 土師器小皿 (37)、大皿 (38・39)、瓦器碗 (40・41)、青磁碗 (42)

第42図 遺物実測図 (1)



- 1 トレンチ SK36内礎石下：土師器皿（43） 遺物包含層：白磁四耳壺（44） SK124：金属製品（49）
 2 トレンチ SK206：白磁杯（45） SK226：石鍋（46）
 3 トレンチ 遺物包含層：青磁盤（47）、東播系須恵器カメ（48）

第43図 遺物実測図（2）

はかる。土師器皿は大小共に、口縁部はヨコナデされやや外方にひらき、底部の厚みは薄くなる。30～32は口径10.7～11.8cm、器高3.5～4.1cmの瓦器碗である。内部のみに粗い暗文をもち、三角形の高台をもつ。33は中国製の白磁杯で、口径10.7cm、器高3.3cmのもの。やや黄味がかかった白釉がかかる。13世紀。34は口径10.3cm、器高4.4cmの山茶碗である。遺構埋土の上層からみつかった。35は東播系の須恵器の摺鉢で、口径34.2cm、器高10.9cm以上である。36は漆器碗である。口縁端部を欠ている。内外面共に黒漆地に、赤漆で鶴をあしらう。

SG41新の土器は、SE67と比べ法量が小型化した13世紀末葉のものである。なかには山茶碗のように14世紀前半のものもあるが、上層でみつかっており、池が完全に埋められた時期を示す。

37～42は、SE19の土器である。37は口径7.2cm、器高1.0cmの小皿、38は口径9.7cm、器高1.8cmの皿。薄手で底部にわずかな突出をもち、口縁部は外反する。39は口径11.2cm、器高3.0cmの大皿である。深身で体部外面にユビオサエ痕が残り、口縁端部はヨコナデにより立上がる。40は口径10.7cm、器高3.7cmの、41は口径13.8cmの瓦器碗である。42は中国製の青磁碗の底部である。体部外面には蓮弁文をもつ。SE19の土器は14世紀前半の特徴をもっている。

43はSK36内の礎石下の土師器皿である。口径10.4cm、器高1.9cm、深身で体部は外反、口縁端部は真上につまむ。14世紀前半。44は1トレンチの遺物包含層からみつかった、中国製の白磁四耳壺の体部である。12～13世紀のもの。

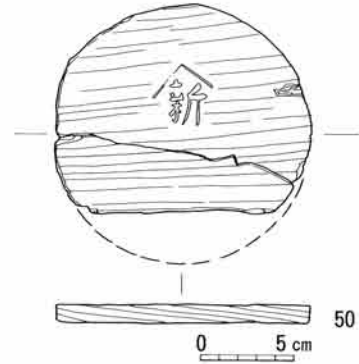
45・46は2トレンチの土器である。45はSK206の底からみつかった白磁の杯である。口径6.8cm、器高3.0cm、体部は薄手で白釉がかかる。中国製で16世紀のもの。

46はSK226からみつかった石鍋。口径30.8cm。

47・48は3トレンチ遺物包含層からみつかったもの。47は中国製青磁盤で、口径23.8cm、全体に濃緑色の釉がかかる。13世紀後半。48は口径31.6cmの東播系の須恵器カメである。体部外面にはタタキメが、内面には当て具痕が残る。13世紀前半。

49は1トレンチSK124からみつかった金属製品である。厚さ約0.3cmのL字の鉄板の縁に、銅製の板をまきつけて鋳留めしている。また片面には木目がよくみえる。縁金具には金の鍍金ないし金箔がみられる。鞍金具の一部と考えているがよくわからない。中世以降のもの。

50は1トレンチの近世井戸SE33からみつかった、木製の円板で、表面に「新」の焼印が打たれる。曲物の底板と思われる。18世紀。



第44図 SE33 木製品実測図

6 まとめ

今回の調査は薪遺跡にとって33年振りの、しかも京都南部を代表する名刹酬恩庵一休寺の北西隣で行ったものであった。

調査の概要については前述したとおりであるが、各トレンチから古墳時代後期の円筒埴輪や奈良時代の土器類をはじめとし、鎌倉時代後半以降は遺構・遺物ともにみられる状況であった。ことに1トレンチの園池とその中にあった大量の土師器皿を主とした遺物は、その出土状況もあわせ注目されるものであり、この園池とその前後の時期つまり13世紀後半から14世紀前半（鎌倉時代後半から鎌倉時代末ないし南北朝時代初め）が、最も傑出した時期であろう。

そこでこの時期について、みつかった遺構・遺物からわかることをまとめてみたい。

当時薪地域は石清水八幡宮の荘園であり、薪荘と呼ばれていた。今回の調査地は、薪の耕作地や集落を一望のもとに見ることのできるやや高まった場所である。そこから当時としては例の少ない園池がみつき、しかもそこで儀式が行われていたこと、各トレンチから当時の優品（白磁四耳壺、青磁盤など）がみられることなどから、薪荘のトップの人物の居館が想定できよう。この人物は在地領主であり、おそらく石清水八幡宮の神人でもあった。

園池については、寺院にともなう例が多く、絵図にも方形の池が寺院の池として描かれている。しかし、池の中から瓦の出土が皆無であること、土師器の皿にも灯明皿として使用されたものは20点程度しかないことから現在のところ寺院の池には否定的であり、居館の中の園池と考えている。この居館は、東西100m以上の規模を持ち、地形からみて北側にも広がるのが予想され、広大な敷地であったことがわかる。園池は東端近くに設けられ、その西側が儀式の場であったことが出土状況からわかる。都（京都）でみられる儀式にともなう土師器皿の大量使用・大量廃棄の行為が、ここでも行われていたことが示され、SK36の瓦器椀が奈良的であるのに比べ、京都市的であるといえよう。

その後は遺構の集中こそみられないものの、江戸時代後半まで遺構・遺物ともほぼ連続してみられることから、引き続き屋敷地であったことがわかる。この点では地元の伝承どおりである。

1トレンチのSK16をはじめその周辺の遺構や江戸時代のSE33などから多くの埴輪がみつかった。円筒埴輪がほとんどであるが、形象埴輪もみられ、須恵器も混じる。調査地の南300mには埴輪をもつ天理山1号墳、西300mには同じく堀切古墳群があるがともに丘陵頂部に立地する。埴輪をもつ古墳は丘陵頂部という点を考えるならば、1トレンチの北西

100m付近は堀切古墳群の残る丘陵の延長部であり、その頂部に埴輪をもつ古墳があったことも考えられる。2トレンチからも数点埴輪があり同時期の須恵器がみついている。

また、1トレンチの遺物包含層や整地層・各遺構から奈良時代の土師器・須恵器・緑釉陶器がみつかった。土師器には内面に放射状暗紋をもつ杯などが、須恵器には底部外面に「千」と墨書された杯Bもある。この時期の遺構はみつからなかったが、周辺（特に北方部）に集落が存在することが予想される。墨書土器があることを重視すれば官衙的な様相もうかがわれる。

次に酬恩庵一休寺との関係を考えてみたい。『薪誌』を参考にまとめると次のようになる。

寺には、江戸時代の由緒書があり、貞享3年（1686）のものが最も古く、元禄16年（1703）のものが詳しい。これらなどでは、鎌倉時代の正応年間（1288～1293）に大応国師（南浦紹明）を開山とする妙勝寺があったが、元弘の変（1331～1334）の際兵火により消失した。その後妙勝寺は荒れはて、その状況を嘆いた一休が永享年間（1429～1441）頃復興を志し、康正2年（1456）に落成、その際に自らの退隠所として草庵を設け、師（大応国師）の恩に酬いるとの意味で酬恩庵と名付けたとされる。

現在開山堂には、大応国師像が安置され、裳裏銘から康正2年（1456）に一休が製作にかかわったことがわかる。

今回の調査でみつかった遺構と妙勝寺開山の頃の寺伝とは重なる部分があることに気付く。つまり調査地の最盛期である鎌倉時代後半から鎌倉時代末ないし南北朝時代（13世紀後半から14世紀前半）の時期である。

大応国師の法嗣絶崖宗卓が大応を開山として、龍翔寺を建立するが、『大徳寺文書』のなかの「龍翔寺領田畠目録」に「山城国薪庄内僧道顕持仏堂敷地当寺末寺」とある。これは元亨2年（1322）に僧道顕が父母等菩提のため山城国薪庄の田畠を龍翔寺に寄進し、持仏堂を龍翔寺の末寺としたものである。この持仏堂が後の妙勝寺の可能性はある。

酬恩庵には、天龍寺第7世比山妙在（1296～1377）が記した「妙勝寺」額が伝えられていることから、鎌倉時代末から南北朝時代に妙勝寺が成立していたことは確かであろう。

『酬恩庵文書』のなかに康正2年4月10日に松井入道宗弁が自分の庵である禅玄庵を菩提所として酬恩庵へ寄進するという書状がある。これが現在知られている最古の酬恩庵の名がみえるものである。これらのことから、康正2年（1456）には妙勝寺が復興され、酬恩庵も完成していた。

大応国師に結びつく僧道顕持仏堂が一休を薪に向かわせることとなり、調査地の13世紀後半からの繁栄ぶりが正応年間妙勝寺開山の寺伝につながるのではないだろうか。

では、この居館の主は誰であったのか。

地元の一部では、新^{あたらし}家があったという。江戸時代後半のSE33からみつけた曲物の底板とみられる円板に「新」の焼印があることに注意したい。

調査地のすぐ西にある薪神社に寛永6年（1639）の木札が納められている。この木札は鎌倉時代から続く大住村との境界争論がようやく終結したことを後世に伝えんとした当時の村役4名が作成し、氏神に奉納したものである。この4名の中に新長兵衛の名がみえる。

『酬恩庵文書』のなかに、一休晩年の弟子とされる祖心紹越（越前朝倉孝景の甥）が永正11年（1514）に酬恩庵にあてた書状がある。これによると、酬恩庵は新家が住職でそれを一休に寄進したことになっている。また、妙勝寺についても新家が開いたようにもうかがわれる。つまり、室町時代には新氏という一族が存在し、鎌倉時代にまで溯れる可能性があり、酬恩庵あるいは妙勝寺を創建できる勢力だったことがわかる。

この新氏は江戸時代まで存続したことが確かめられ、この新氏こそがこの居館の主であったとみることが現在のところ最も有力である。

《参考文献》

京都府立山城郷土資料館『酬恩庵の文書から』（1985）

薪誌刊行委員会『薪誌』（1991）

中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』（1995）

報告書抄録

ふりがな	たきぎいせきはくつちょうさがいほう							
書名	薪遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名								
編集機関	京田辺市教育委員会							
所在地	〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地							
発行年月日	2000(平成12)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
薪遺跡	京田辺市新 里ノ内2ほか	26342		34° 49′ 06″	135° 45′ 34″	1999年 8月6日 ～ 1999年 12月22日	730	土地区画 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
薪遺跡	集落跡	鎌倉時代 後半～ 鎌倉時代末 乃至南北朝 時代前半	園池跡 井戸跡 土坑 礎石建物跡 掘立柱建物跡 溝		埴輪 須恵器 土師器 瓦器 陶磁器 木製品 金属製品		<ul style="list-style-type: none"> ・在地領主の居館跡 ・儀式に伴う土師器皿の大量投棄が行われた園池跡 ・竹組井戸 	

平成12年 3月30日 印刷

平成12年 3月31日 発行

薪遺跡発掘調査概報

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書第30集)

編集・発行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

電話 0774-62-9550

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

電話 0742-63-0661